

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2015

課題番号：25300024

研究課題名(和文) 在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信

研究課題名(英文) Basic Studies on Buddhist Art from Japan in European Collections and Formation of a Database for the Understanding of Japanese Buddhist Art

研究代表者

Kreiner Josef (KREINER, Josef)

法政大学・国際日本学研究所・客員研究員

研究者番号：50440102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：欧州には日本仏教美術品が数多くあるが、その分野の専門家が少ないために殆ど調査がなされていなかった。本プロジェクトではそれらを網羅的に調査・研究して来歴・性格等をつかみ、デジタル化してそのデータを公開するに至った。調査では法隆寺からの流出物である伎楽面を再確認できたほか、それ以外にもこれまで知られていなかったコレクションの内容が判明している。また、これらの仏教美術品の分析を通して仏教美術品が欧州における日本観の形成に多大な影響を与えていることも明らかになった。各博物館からは今後も情報を提供してもらえることになっており、本プロジェクトは仏教美術品を通して日本と欧州の新たな関係を構築したと言えよう。

研究成果の概要(英文)：This project is based on the paradigm-shift in Japanology from the philological to the visual focus. Due to this, the importance of museums takes on a new level and cooperation between European scholars and Japanese specialists becomes vital. Studies conducted in cooperation with more than 350 museums have shown that more than 500,000 objects of Japanese art are kept in Europe. A great impact on the evolution of the European image of Japan has been exerted by Buddhist art. We approached more than 30 museums to conclude contracts for providing digital images and metadata of their collections, which were included in the database "Japanese Buddhist Art in European Collections". The database comprises about 3,800 items, and will be developed further. Our research revealed new findings such as the Gigaku masks in the Museum of Five Continents Munich and the Spinner Collection of religious culture at the Ethnographic Museum, Univ. Zurich as well as the Manos collection of Greece.

研究分野：文化人類学、日本学

キーワード：日本美術史 仏教美術 博物館 美術館 日欧交流 日本学 日本観 文化人類学

1. 研究開始当初の背景

(1) 文献学的方法論に重点を置く地域研究の分野では、1990年代頃からパラダイムの変容が起こった。すなわち文字の資料または社会科学のアプローチと平行して、モノに注目し、それぞれの文化の立体的な再構築と理解を試みる研究が盛んになった。これにより博物館・美術館に保管されているコレクションの役割が重大なものとなり、大学とそれらの機関の間における共同研究が必要となった。当研究プロジェクトは、これを出発点とした。

(2) ドイツ・ボン大学日本学科が長年行ってきた中欧の博物館・美術館における日本コレクション研究の集大成として、2003年トヨタ財団の援助を受けて国際シンポジウムを開催し、約60ヶ所の博物館・美術館の日本部門の担当者の参加を呼びかけ、全欧州における日本コレクションの歴史と現状を討論し、成果を2冊の英文報告書で発表した。その結果、数カ所の国立博物館等を除いてほとんどの館に日本専門の学芸員がいないため、各コレクションの内容を把握するのが難しく、大学側もとくに日本美術の教員が少ないという状況ゆえ、日本の専門家の協力が必須であることが判明した。また、欧州の約350ヶ所の博物館・美術館に50万点以上の日本コレクションが保管されているが、その内訳を見ると、60%が19世紀後半以降の欧州の美術史に重大な影響を及ぼした浮世絵で占められている。しかし、収集数では劣るとはいえ、仏教美術のコレクションも大きな役割を果たしている。とくに明治の廃仏毀釈運動の関係と、欧州における仏教研究等の影響により、たとえばフランスのチュルヌスキヤギメー、イタリアのキョッソーネとラギーザ、ドイツのクンメルとグロッセまたはパリで活躍した日本の美術商林忠正等の優れたコレクターが現れ、彼らの努力により仏教関係の美術品が欧州における日本文化の理解のツールとして収集されており、浮世絵をもとにしている日本観と併行して、仏教的日本文化がもたらすイメージに注目することが必要であることを確認できた。

(3) この一連の研究を基礎とする、全欧州の博物館・美術館に保管されている日本仏教美術の悉皆調査研究を行い、その成果をデータベース化し、またそれを通じて欧州の日本観を分析する研究プロジェクトが2010年から3年に亘って法政大学国際日本学研究所で行われた(「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」)。このプロジェクトでは、スイス・チューリッヒ大学東洋学科長ラジ・シュタイネックの協力を得、また同大学のシュタイネック智恵に欧州側との調査協力およびデータ提供契約の交渉および基本調査とメタデータの収集から多数の所蔵品解説等を受任していただいた。しかし、前述したように、欧州の博物館・美術館には日本美術史なかんずく日本仏

教美術専門の担当学芸員がおらず、そのため博物館が提出した資料もデータに乏しく、実地調査の協力を得ることも困難を極めた。そうしたなかでチューリッヒの専門的指導で基本的な知識が多くある博物館に伝わったが、こういった課題は、法政大学の企画の最終報告の場として2012年6月ポーランドで開催した国際シンポジウムにおいて浮き彫りとなり、日欧で共同研究を進めることの重要性を改めて認識するに至った。

(4) これまでも主だった博物館・美術館に保管されているコレクションのデジタル化は推進されてきており、日本側の大型調査研究プロジェクトも進んでいる。例えば立命館大学の本文化資源デジタル・アーカイブ企画、人間文化研究機構(国立歴史民俗博物館:海外にわたった19世紀の日本コレクション)を挙げることができるが、それらに比べ日本仏教美術の調査研究は遅れをとっている。

2. 研究の目的

(1) 第一の目的は欧州の博物館・美術館に保管されている日本の仏教美術(彫刻、絵画、書、法具、袈裟等の染物・織物、及びおふだ)のすべてを把握することと、それらのデータベース化である。この場合、コレクターの個性、収集の目的、欧州での調査研究、展示、発表等に注目する必要がある。また、モノ自体の作者、由来、記述についても詳しい調査が望ましい。データベースは以前のプロジェクトで作成された法政大学国際日本学研究所のJapanese Buddhist Art in European Collections(<http://aterui.i.hosei.ac.jp:8080/index.html>)にて一般公開されている英文のデータベースを引き続き活用する。平成28年3月31日現在3810点のモノが掲載されているが、まず、それらを保管・管理する各博物館・美術館(場合によっては国の文部省等の担当機関)と公開のための契約を結ぶ必要があった。

(2) 次にこのコレクションの相関関係を明らかにすることが必要である。たとえば大シーボルトが欧州に持ち帰った『仏像図彙』は、ライデン大学のホフマンの翻訳を基礎にし、フランスのギメーが明治初期に集めた仏教彫刻の優れたコレクションの体系化のために活用されたものである。またパリのギメー国立東洋美術館のコレクションを元に、20世紀後半に体系的なおふだのコレクションを集めたフランク教授の研究も進行していた。あるいはまた19世紀後半にパリで活躍した日本美術商・林忠正の個人のコレクションはビングが担当したオークションで競り売られ、欧州全地域に分散されたが、当時のカタログ等での行方がある程度たどることも可能で、そこから新しい知見が生み出せる可能性がある。

(3) 最終的な目的は、こういったコレクショ

ンが欧州における日本文化のイメージ、日本観、あるいはまた宗教ないし思想・哲学としての仏教についての考え方にいかに影響を及ぼしたのかを考察することである。

3. 研究の方法

(1) 日本仏教美術のコレクションを所有する各博物館・美術館のなかで、収蔵数の多い館とできるだけ幅広く連絡をとり、そのコレクションに含まれている仏教美術関係のものを報告してもらうことが重要である。この作業は多くの場合、すでに繰り返し述べているとおり困難であり、直接の調査は不可能だとしても写真だけでも送ってもらうなどの方法で情報収集を行った。各館から提供してもらった日本コレクションについての情報は編集・公開し、その分析によって仏教美術のコレクションの有無を判断することが可能になった。

(2) 第一段階の情報をふまえて、相手側博物館・美術館の学芸員と共に、プロジェクトに参加している日本人研究者あるいはまた海外研究協力者による実地調査を国際的あるいは学際的共同研究の形で行った。

(3) この調査研究で得た情報を相手側の博物館・美術館に提供するほか、学会・国際シンポジウム並びに一般公開講演会を通して欧州および日本において紹介した。具体的には2014年リュブリャナで開催された欧州日本研究協会の国際学会でパネルを組織して、このプロジェクトとその成果を紹介したほか、2015年6月法政大学国際日本学研究所におけるおふだ研究についての国際シンポジウムの開催、同年9月のスイス・ジュネーブ市立民族学博物館での国際シンポジウムで成果の研究発表を行った。

4. 研究成果

初年度は計画全体を見通した円滑な調査活動を進展させるために、包括的な事前交渉に力を入れた。これまで調査の手が及んでいない館を中心に、新たな仏教美術作品の発掘と、所在が確認できなくなっている作品の調査要請などを行うため、いくつかの主要な施設の館長ないし学芸部長に面会し、また現場の責任者などとも打ち合わせを繰り返した。当企画への協力とデータの公開のための契約書締結交渉も同時に行った。主要な博物館・美術館としては、ヴィーン国立工芸美術館、フライブルグ市立博物館、ミュンヘン五大陸博物館、エッセン・フォルクワング美術館、イスラエルの国立美術館及び国立図書館、またパリ・ギメ国立東洋美術館、ケブランリー博物館、ジュネーブ・ボードメール財団博物館及び市立民族学博物館、アイルランド・チェスタービッティー図書館、イタリア国立民族学博物館、ギリシャ国立東洋美術館等が挙げられる。そして、可能であれば現物調査・撮影なども実際に行った。収集したデータは法政大学国

際日本学研究所が公開している **Japanese Buddhist Art in European Collections** (JBAE) に組み込み、画像付データベースとして広く一般公開できた。博物館・美術館との面談に際しては、現地からの要請に応じて様々なアドバイスを与えることもでき、互いの信頼関係を固めることもできた。例えばジュネーブ市立民族学博物館では、この調査を契機に在欧日本仏教美術の大規模な展覧会を企画・開催(2015年9月9日-2016年1月10日、**Le Bouddhisme de Madame Butterfly - Le Japonisme bouddhique**)するに至り、シュタイネック智恵法政大学客員研究員が顧問委員として相手方にアドバイスを与え、相手方からはこちらの調査に対して多大な協力を得るといふ協力関係を築くことができた。

また、ロシア(サンクト・ペテルブルグのクンストカメラ、モスクワのロシア国立東洋美術館)、エストニア(タリンはじめ各地)、フィンランド(ヘルシンキ中心)など、東欧の博物館・美術館をも含めた日本仏教美術コレクションについて、網羅的な報告を集めることができた。これらに加えて、次年度にこれを中心に、新たに報告を受けた33ヶ所の博物館・美術館の情報、また、日本の研究分担者および研究協力者の成果を合わせて、英文報告書 **Japanese Collections in European Museums III, Regional Studies 2** を刊行した。このレベルまで掘り下げての網羅的な報告はいままでになかったことである。

繰り返しになるが、規模の大きい財団法人または国立博物館・美術館は特別展の準備あるいは中国・韓国からの調査団の対応に追われて多忙である。一方、小規模な地方博物館等には東洋美術なかんづく仏教美術専門の学芸員がいない。そのため、日本の専門家(当プロジェクトの研究分担者・連携研究者ないし研究協力者)による現地調査研究のための時期交渉は極めて難しい。にもかかわらず、両者の妥協の結果と欧州側の好意によっていくつかの重要な現地調査を実現することができ、大きな成果を収めることができた。

これまで開催した主要な展示会・講演会としては以下のものがある。

2014年8月末にはリュブリャナで開催された欧州日本研究協会の第14回研究大会ではこのプロジェクトの成果をパネルのかたちで紹介した。ここでの報告は、本プロジェクトの最終英文報告書 **Japanese Collections in European Museums V** (2016年5月刊行) に収載される。

また、2014年11月28日から翌年5月17日まで、スイスのチューリヒ大学附属民族学博物館で特別展示「**Tokens of the Path - Japanese Devotional and Pilgrimage Images, The Wilfried Spinner Collection**」(新発見のコレクションの、シュタイネック智恵による悉皆調査研究、企画・運営及び図録執筆)を開催し、221頁の独文・英文の図録も作成した。

調査の中でも特筆すべきは、小口雅史と杉本一樹（宮内庁正倉院事務所）による、ミュンヘン五大陸博物館、ベルリン国立東洋美術館とヴィーン世界博物館に保管されている伎楽面の比較調査研究である。ミュンヘンとベルリンのものはグロッセの収集で互いに深い関係を持ち、両者がもとは法隆寺のものであることを確定・再確認できた。

須藤弘敏はダブリンのチェスター・ビーティ所蔵の近世仏教美術および写経の調査を実施し、とくに仏龕群が日本国内では四散してしまったもので近世宗教美術の研究においても重要な存在であることを確認した。島谷弘幸は大英博物館・大英図書館において書籍類の集中調査を実施した。

最終年度もこれまでと同様、プロジェクトで計画している調査活動を円滑にするための交渉にさらなる重点を置くことから始めた。とくにプロジェクト終了後も協力する意志を示してくれたいくつかの博物館・美術館と詳細な協議を続け、各館で保管しているコレクションの内容およびその由来、また現状についての情報の収集に成功した。この作業にはチューリヒ大学日本学科の協力・支援が不可欠であった。またそのなかでシュタイネック智恵の交渉力および専門的調査研究と現場の指導が重要なものであった。

長期的な協力を得たのは主に次の館である。

ギメー東洋美術館（フランス）、コルフ国立東洋美術館（ギリシャ）、コルチェ市立東洋美術館（アルバニア）、ヴィーン国立工芸美術館（オーストリア）、フォルクワング美術館、ケルン市立東洋美術館、ブレーメン海外博物館、ミュンヘン五大陸博物館（以上ドイツ）、ヴィクトリア・アルバート工芸美術館（イギリス）、プラハ国立民族学博物（チェコ）、ジュネーブ市立民族学博物館、ボードメール財団、チューリヒ大学附属民族学博物館（以上スイス）。

おもな海外調査としてはドイツのエッセン、ケルン、ブレーメン、DKM 財団等の美術館の調査、コルフ国立東洋美術館の調査、ロンドン V&A 工芸美術館の仏教関係織物調査、ジュネーブのボードメール財団の初調査等があり、いずれの調査でも詳細な情報を得ることに成功するなど有意義な成果を得ることができた。

2015年7月28日には国際シンポジウム「欧州コレクションにおける日本の宗教画と「おふだ」が伝える江戸時代の信仰」を法政大学で開催し、欧州における日本仏教寺院のおふだのコレクションの収集史とそれを通じて見られる江戸時代の庶民信仰について討議した。また、同年9月から翌年1月まで当プロジェクトの成果を基盤として、スイス・ジュネーブ市立民族学博物館で「Le bouddhisme de Madame Butterfly – Le japonisme bouddhique」（蝶々夫人の仏教—仏教のジャポニスム）」の特別展が開催され、合

わせてチューリッヒ大学東洋学科長シュタイネック教授が企画主催した国際シンポジウム「Le japonisme bouddhique: negocier le triangle religion, art et nation（仏教的ジャポニスム）」が開催され、当プロジェクトの最終目的、すなわち欧州に保管されている日本仏教美術のコレクションと欧州における日本観との関係について議論を深めることに成功した。この二つのシンポジウムの成果は2016年5月に刊行の最終報告書『Japanese Collections in European Museums V, with Especial Reference to Buddhist Art』に記載される。この報告書では、チューリヒのコレクションを中心に、フランクのコレクション、大英博物館のコレクション、プラハの国立民族学博物館のコレクション、そして、オックスフォードのチェンバレンのコレクションにも言及されており、欧州でこれまであまり注目されなかった新しい研究分野を開拓することに成功した。また、2016年3月にはフランス・コルマル CEEJA と立命館大学共催の、ウンターリンデン美術館で開催された国際シンポジウムでクライナー及びシュタイネック智恵の二名が当プロジェクトの成果を報告し、この席上で立命館大学欧州アトリサーチ・プロジェクトとの連携について意見を交わすことができた。

これら一連の研究により、欧州における日本関係コレクションの性格が明らかになってきた。すなわち、約350の博物館・美術館に保管されている50万点以上の日本コレクションの内、およそ60%は浮世絵が占めるが、仏教美術品は当初の予想よりも収集数が多く、また浮世絵のコレクションとほぼ同時代、すなわち明治時代（＝神仏分離の時代）に収集されたものである。このことはすなわち、欧州における日本観が浮世絵と印象派との深い関係のみならず、同時代に収集された仏教美術によっても形作られていたということを示している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計46件）

- (1) 須藤 弘敏、Collection of Small Buddhist Sculptures of the Edo Period at Chester Beatty Library、Japanese Collections in European Museums V、査読無、一、2016、pp.41-44
- (2) 高橋 悠介、Formation and Development of the Image of Aizen-Myo-o and Examples in European Museums、同上、pp.33-40
- (3) 小山 弓弦葉、Buddhist Textiles in the Victoria and Albert Museum Collection、同上、pp.45-66
- (4) Tomoë I.M. Steineck、Ofuda or not: Defining a Philosophical Collection -

Understanding Japanese Religiosity Through a Material Collection、同上、pp.71-80

- (5) Josef Kyburz、Paper Charms and Folk Beliefs - Some Illustrations of the Cult of Ganzan daishi、同上、pp.93-110
- (6) Josef Kyburz、Japanese Buddhist Art in Europe and the Collection of Hayashi Tadamas、同上、pp.167-200
- (7) 島谷弘幸、美の国 日本—アジアとの交流と日本人の美意識—、『美の国 日本』図録、査読無、一、2015、pp.6-7
- (8) Princess Akiko of Mikasa、Curator, Doctor and Archaeologist - Collecting Japanese Antiquities for the British Museum、2013年度・2014年度 英文報告書 欧州博物館・美術館保管の日本コレクション—仏教美術を中心に—、査読無、一、2015、pp.39-54
- (9) Tomö I.M. Steineck、The Japanese Collection of the Fondation Martin Bodmer, Geneve: An Introduction、同上、pp.363-368
- (10) Tomö I.M. Steineck、The Collection of Japanese Art by Victor and Marianne Langen, Langen Foundation, Neuss、同上、2015、pp.379-385
- (11) Josef Kyburz、Ofuda - An Overview - 「おふだ」概論、Ofuda -Amulettes et talismans du Japon -、査読無、一、2014、pp.349-397
- (12) Josef Kreiner、西洋人の見た日本、岩波講座 日本の思想、査読無、3巻、2014、pp.85-120
- (13) 島谷弘幸、和様の書の魅力、聚美、査読無、8巻、2013、pp.14-39
- (14) 島谷弘幸、和様の書、『特別展 和様の書』図録、査読無、一、2013、pp.9-28
- (15) 稲本泰生、隋唐期東アジアの「優填王像」受容に関する覚書、東方学報、査読有、88巻、2013、pp.111-149
- (16) 彬子女王、海を渡った法隆寺壁画—西洋における「うつし」の役割—、写しの力：創造と継承のマトリクス、査読無、一、2013、pp.205-221

[学会発表] (計 18 件)

- (1) Josef Kreiner、Japanese Collections in European Museums, History and Present State、Japanese Cultural Assets and Digitalization、2016年3月29日、Colmar (France)
- (2) Tomö I.M. Steineck、"Golden Key or Rusty Iron?" The Usefulness of Comprehensive Databases for Museums, The Example of JBAE、2016年3月29日、Colmar (France)
- (3) Josef Kreiner、シーボルト父子の日本コレクションとヨーロッパにおける日本研究、人間文化研究機構第 27 回公開講演

会・シンポジウム「没後 150 年シーボルトが紹介した日本文化」、2016年1月30日、ヤクルトホール (東京都・港区)

- (4) Josef Kyburz、Japanese Buddhist Art in Europe and the Collection of Hayashi Tadamas、Japanese Buddhist Art in Europe and the Collection of Hayashi Tadamas、Buddhist Japonisme、2015年9月18日、Geneva (Switzerland)
- (5) Josef Kreiner、ヨーロッパの日本コレクションを考える—仏教美術を中心に—、公開講演会「欧州コレクションにおける日本の宗教画と「おふだ」が伝える江戸時代の信仰」、2015年7月28日、法政大学 (東京都・千代田区)
- (6) Tomö I.M. Steineck、十六善神から庚申講まで: シュピナー・コレクションを通して蘇る近世の民間信仰、公開講演会「欧州コレクションにおける日本の宗教画と「おふだ」が伝える江戸時代の信仰」、2015年7月28日、法政大学 (東京都・千代田区)
- (7) Josef Kyburz、フランク・コレクションと民間信仰の「おふだ」: 元三大師と柴又帝釈天の御影を例として、公開講演会「欧州コレクションにおける日本の宗教画と「おふだ」が伝える江戸時代の信仰」、2015年7月28日、法政大学 (東京都・千代田区)
- (8) Josef Kyburz、Das Heiligenbild in Japan、Voelkerkundemuseum der Universitaet Zuerich、2015年1月22日、Zuerich (Switzerland)
- (9) Josef Kyburz、Presentation of the Research Project 'Japanese Buddhist Art in European Collections'、14th International Conference of the European Association for Japanese Studies、2014年8月28日、Ljubljana (Slovenia)
- (10) Josef Kreiner、ヨーロッパにおける日本関係コレクション—美術工芸から民具へ、国際シンポジウム「渋沢敬三の資料学—日常史の構築」、2014年3月9日、神奈川大学 (神奈川県・横浜市)
- (11) 澤田和人、シーボルト・コレクションの染織品、国際シンポジウム『シーボルトが紹介したかった日本』、2014年2月12日、ボーフム (ドイツ)
- (12) 島谷弘幸、展覧会による日本美術の情報発信、第6回 21世紀ミュージアム・サミット、2014年2月8日、湘南国際村学術センター (神奈川県・三浦郡葉山町)

[図書] (計 10 件)

- (1) Josef Kreiner(ed.)、Bier'sche Verlagsanstalt、『Japanese Collections in European Museums V, with Especial Reference to Buddhist Art』、2016、381
- (2) Josef Kreiner (ed.)、Bier'sche

Verlagsanstalt、『Japanese Collections in European Museums III, Regional Studies 2』、2015、412

- (3) 須藤 弘敏、中央公論美術出版、『法華経写経とその荘嚴』、2015、252
- (4) 清水 健 他、小学館、『日本美術全集 1 1 テーマ巻 2 信仰と美術』、2015、304(193-209)
- (5) 高橋 悠介、神奈川県立金沢文庫、『中世密教と〈玉体安穩〉の祈り』、2014、99

[その他]

ホームページ等

<http://aterui.i.hosei.ac.jp/oguchi/jbae/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

ヨーゼフ クライナー (KREINER, Josef)
法政大学・国際日本学研究所・客員研究員
研究者番号：50440102

(2)研究分担者

島谷 弘幸 (SHIMATANI, Hiroyuki)
独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・部局なし・館長
研究者番号：90170935

河合 正朝 (KAWAI, Masatomo)
慶應義塾大学・文学部・名誉教授
研究者番号：30051668

須藤 弘敏 (SUDO, Hirotooshi)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：70124592

小口 雅史 (OGUCHI, Masashi)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：00177198

赤尾 栄慶 (AKAO, Eikei)
独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部・上席研究員
研究者番号：20175764
(平成26年度まで研究分担者)

(3)連携研究者

彬子 女王 (Princess Akiko of Mikasa)
立命館大学・衣笠総合研究機構・特別招聘准教授
研究者番号：20571889

稲本 泰生 (INAMOTO, Yasuo)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：70252509

丸山 士郎 (MARUYAMA, Shiro)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部博物館教育課教育講座室・

室長

研究者番号：20249915

沖松 健次郎 (OKIMATSU, Kenjiro)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部企画課特別展室・主任研究員

研究者番号：30332133

伊藤 信二 (ITO, Shinji)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部博物館教育課教育普及室・室長

研究者番号：00443622

浅見 龍介 (ASAMI, Ryusuke)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部調査研究課東洋室・室長
研究者番号：30270416

野尻 忠 (NOJIRI, Tadashi)

独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館・学芸部企画室・室長

研究者番号：10372179

清水 健 (SHIMIZU, Ken)

独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館・学芸部企画室・主任研究員
研究者番号：80393370

小山 弓弦葉 (OYAMA, Yuzuruha)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部調査研究課工芸室・室長
研究者番号：10356272

澤田 和人 (SAWADA, Kazuto)

国立歴史民俗博物館・情報資料研究系・准教授

研究者番号：80353374

高橋 悠介 (TAKAHASHI, Yusuke)

神奈川県立金沢文庫・学芸課・学芸員
研究者番号：40551502

スティーブン ネルソン (NELSON, Steven)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：60326171

(4)海外研究協力者

ヨーゼフ キブルツ (KYBURZ, Josef)

トモエ イレーネ マリア シュタイネック 智恵 (STEINECK, Tomoë I.M.)